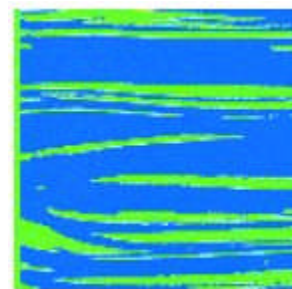


日本行動分析学会ニュースレター

J-ABAニュース



2010年 秋号 No.60 (2010年12月22日発行)

発行 日本行動分析学会 理事長 藤 健一

〒540-0021 大阪市中央区大手通2-4-1 リファレンス内

FAX: 06-6910-0090 (日本行動分析学会事務局と明記) URL: <http://www.j-aba.jp/>

E-mail: j-aba.office@j-aba.jp

追悼文: 佐藤方哉先生を偲ぶ	藤 健一
追悼文: 佐藤方哉先生を悼む	山口 薫
追悼文: とりとめのないことを思い付く儘に…	望月 要
追悼文: 佐藤先生の思い出	遠藤清香
日本行動分析学会第28回大会を開催して	榎藤真織
学会実践賞を受賞して	藤坂龍司
J-ABA2010 大会参加体験記: 行動分析学を学ぶということ	八木広大
J-ABA2010 大会参加体験記: 学会という強化随伴性	佐々木銀河
連載: 海外で学ぶ学生、海外で働く専門職 (7) Over Time: 最初の一步とその延長線上にあるもの	黒田敏数
Local Beer SIG が結ぶご縁	山本華奈子
自主公開講座報告: 支援ツールを活用した特別支援学校からのチャレンジ	平澤紀子
ローラ・シュライブマン博士をお迎えして: PRTの基礎と実践を学んだ日々	加藤愛理
連載: 今こんな研究をしています(13) 看護師・音楽療法士が応用行動分析学と出会う	松崎敦子
自著を語る: 『応用行動分析学から学ぶ子ども観察力&支援力養成ガイドー発達障害のある子の行動問題を読み解く!ー』	平澤紀子
『行動分析学研究』佐藤方哉先生追悼特集のお知らせ	編集委員会
編集後記	ニュースレター編集部

佐藤方哉先生を偲ぶ

理事長 藤 健一

佐藤方哉先生が奇禍に遭遇されてお亡くなりになってから、早くもふた月が経ちました。先日の神戸親和女子大学で開催された第28回年次大会におきましても、先生を偲ぶ縁となる

いろいろな書籍や写真の展示がありましたが、小生は現在学会にかかわる一員として、その失ったものの大きさを改めて実感しております。

ところで、小生が佐藤方哉先生と接する機会を得ましたのは、1996 年に小野浩一先生が理事長となった理事会の一員に小生が加わった頃であったかと思います。当時の常任理事会は年に 4 回ほど駒澤大学の会議室で開催されておりました。今から 14 年ほど前の当時の常任理事会の様子は、現在のそれとはかなり雰囲気も様子も違っており、全体としてゆったりとした雰囲気の中で会議の進められていたことが印象に残っています。その中でも、佐藤方哉先生の会議におけるご発言は独特のペースのもと、会議が終えた後にはいつでも春風駘蕩といったような余韻がありました。当初の常任理事会は土曜日の午後 3 時ころに開始して 6 時か 7 時には終えることが多く、小生は最終の新幹線で京都に帰るというスケジュールでおりました。ところが、常任理事会の回を重ねて 2、3 年目あたりから、会議での討論も徐々に活発となり、それに伴って佐藤方哉先生のご発言も回を追う毎に伸長の気配が兆してきました。そうこうしている内に、最終の新幹線には到底間に合わないことがはっきりとしてきましたので、それ

以降は会議当日は東京に泊まることにしました。

会議の後には大概都合のつく先生方で懇親の機会が設けられ、佐藤方哉先生もそのお一人として殆ど欠かさず参加なさっていました。小生もそのときの先生方の会話と食事との合間に、楽しそうに耳を傾けてビールを召し上がる先生を今でも彷彿致します。

この写真は、今から約 12 年前の 1998 年 12 月 19 日（土）に京都の立命館大学で開催された第 76 回常任理事会の際に撮影されたものです（撮影 行動分析学会事務局？）。文学部の清心館屋上から衣笠山を背景として当日出席された常任理事の先生方が写っていますが、行動分析学会のこの種の写真としては珍しく前列の先生方が肩を組んでいます。何か期することでもあったのでしょうか。

行動分析学会は間もなく創立三十年を迎えます。創立二十年のときにいらっしゃった佐藤方哉先生が、創立三十年という学会発展の節目にいらっしゃらないことは、大変残念ではありますが、しかし、行動分析学会と日本の行動分



析学の進展とその成果とを世の中に、世界に発信し、その真価を問うことこそ行動分析家と行動分析学がなすべきことと思います。そして、

それを佐藤方哉先生にご報告できる日の来らんことを念じて、擱筆いたします。

佐藤方哉先生を悼む

山口薫（日本共生科学会会長・星槎大学特任教授）

佐藤方哉先生が不慮の事故で亡くなってから、3ヶ月近くになりますが、今でも、もしかしたら、ひょっこりどこかから現れて「悪い冗談だった。」と言って下さるのではないかという気さえする程信じがたい思いであります。

先生は、学者として、日本のみならず世界の一流の研究者であったことは、今更申し上げるまでもありません。行動分析学を日本に導入し、慶応大学での動物実験に基づく実証的研究、B.F. スキナー教授との親交、日本行動分析学会創立、国際行動分析学会会長としてのご活躍など、詳しいご研究の業績については、他の方からご報告があるでしょうから、私は、行動分析学会創設に関連した先生との関係、そして、星槎大学学長として私の後を引き受けていただいた前後のエピソードなどを中心に私の知る限りの先生のお人柄について述べさせていただきます。

行動分析学は大きく基礎行動分析学と応用行動分析学に分かれますが、私が、昨年6月に、100歳7ヶ月の天寿を全うされて亡くなった、当時イリノイ大学教授であられたシドニー・ビジュー先生から学んだ応用行動分析学を日本に導入したのは、佐藤先生が慶応大学で実験行動分析学の研究を始められた遙か後の、1968年でした。その後、応用行動分析の原理に基づく実践的研究が日本で広がっていく中で、実験分野と応用分野を統合して、日本行動分析学会が創設されましたが、当然初代会長になられるべき佐藤先生は、私が年長であることから、私を初代会長に推挙して下さったのでした。

佐藤先生とはその頃から一層個人的に親しく

お付き合いさせていただくことになりました。私が、星槎大学の初代学長に就任して数年経過した頃から、私も高齢なので、何が起こるかわからないので、次の学長候補者を内々探すことになり、私もいろいろあたってみたのですが、何しろ本校が北海道芦別市にある通信制の大学なので、なかなか引き受けて下さりそうな人が見つからないで困っていました。そんな中で、日本行動分析学会が関西学院大学で開催された時、たまたま佐藤先生に、「誰かいい方をご存知ありませんか」と声を掛けましたら、即座に「私にやらせて下さい」と引き受けて下さいました。

それからは、星槎大学の同僚として頻繁にお会いすることになりましたが、先生は一見、狷介不羈、寡黙で取っ付きがたい印象を受ける方もあるかと思います。しかし、先生は御尊父の佐藤春夫様とお顔もそっくりなだけでなく、極めて優れた芸術的感性を受け継がれておられ、自らピアノを弾き、作詞作曲をされ、また回文の名手でもありました。先生が出版された、これも回文の「河馬の馬鹿」という戯れ句集のご著書や作詞作曲されたCDを頂いておられる方も多いと思います。

こよなくお酒を愛され、度々ご一緒に飲む機会がありましたが、一番思い出に残っておりますのは、学長に就任される前ですが、当時三軒茶屋にあった、イタリアの老婦人が店主の、常連ばかり集まる小さなイタリアレストランに招いて下さり、次々に珍しいイタリア料理を頂きながら、二人で赤ワイン2本を空けた時のことです。

先生は酔うほどに体を前後左右に揺らしながら、学問は言うに及ばず、政治、文学、音楽、正に談論風発、その中で旧ソ連の国際的心理学者で私の恩師でもあるアレキサンドル・ルリヤ先生のロシア語の分厚い本を買って今ロシア語の勉強をしているということや、ご母堂千代様の前のご主人谷崎潤一郎様にも可愛がられ、自転車を買ってもらい一緒に遊んで下さったと言った思い出などもうかがいました。

昨年、私は佐藤先生と共に、「日本共生科学会」を創設しました。日本のみならず、地球そのものが存亡の危機に直面している今こそ、という正に大切な時期に不慮の災難に遭って他界されました。痛恨の極みではありますが、残された私たちは、先生の残されたご遺志を引き継ぎ、全ての人を包み込んで共に生きる「共生」社会の実現に向けて全力を尽くすことをお誓い申し上げ、追悼の言葉と致します。合掌。

とりとめのないことを思い付く儘に…

望月 要 (帝京大学)

クレタ島（注 1）に行って来ました。少し暑かったですが、のんびりとした、いいところでしたよ。物価は安いし、ギリシャ料理は美味しかったし… 兎のシチューとか、仔羊の煮込みとか。真邊さんご夫妻と一緒に食事をしました。そう、ジャネットとトマナリ氏（注 2）が来ていました。

今でも、近い内に桜ヶ丘か三田のどこかの店で、佐藤さんとそんな話をする機会がありそうな気がしています。ちょっと羨ましそうな顔をして「フェー」とか言う声が聞こえてきそうです。私の周りには、様々な弁別刺激や条件刺激があって、私の佐藤さんに関わる行動をいまだに強く制御しているのでしょう。そういう刺激がだんだん機能を失って行くのは寂しいことですが、行動の原理である以上、仕方のないことです。

佐藤さんと初めて会ったのは多分 1981 年、私が学部 1 年生の夏の終り頃だったように思います。私は日吉で望月昭さんの授業を受けていて、誘われて上級生の実験の手伝いなどしていました。実験の被験者（そう、当時は被験者と呼んでいました…）を求めていると云われて、初めて三田に連れて行って貰ったとき、偶然、実験室で佐藤さんと会って、昭さんが「この人、心

理に来るから」というような紹介をしてくれました。「必ず心理に来れるとは限りませんよ…」と云うのが初めて聞いた佐藤さんの言葉でした。

佐藤さんの周りにいた人は誰もが知っていることですが、佐藤さんは実に多面的な人でした。互いに相容れない理論や考えの双方を即座に的確に理解できるし、様々な個性や趣味を持つ人達を受容れて親しくなれた。この類稀な資質が、研究にも教育にも最大限に、でも極めて自然に発揮されていました。だから佐藤さんの周りには実に様々な人達が集まっていて、佐藤さんはそのひとりひとりと、しっかりとした接点を持っていたと思います。佐藤さんがいなければ、互いに知り合う機会も、親しくなることもなかったような人達が、佐藤さんを核にして繋がっていました。

私は、そもそも「弟子」とか「師弟」という言葉自体が好きではないし、《徒党》を組むのは大嫌いな人間ですので、決して従順な学生であった訳ではありません。指導教員と学生の関係でありながら、殆ど口も利かなかった時期もあったように思います。それでも、帝京大学に呼んで貰い、2004 年から 4 年間、同僚として過ごすことになりました。今、これを書くために数えてみると、たったの 4 年間なのですが、主観

的にはずっと長かったように思います。

一度だけ、帝京で佐藤さんの担当科目の定期試験の監督と一緒にやったことがあります。試験はマークシート式で、最初の10問ぐらい、ずっと「1」が正解になるような《仕掛け》になっているのですが、自信のない学生は不安になって無理して「1」以外の選択肢を選んだりする。佐藤さんは、そんな学生達的答案を覗き込んで、愉快そうに「なんで（ずっと1が続くということに）気付かないんだろうね?」とヒソヒソ話をしてきました。監督教員が試験中にお喋りするのには気が引けるので、黙って頷いて離れようとする、と追っかけて来て「今晚、呑みに行きましょう」とか言いに来る。かつての指導教員と一緒に試験監督をする、というのは、なんだか不思議な感じがしたものです。

私が帝京に移って2年目ぐらいだったでしょうか、佐藤さんが「最近になって漸く、昔、横山先生（注3）が講義でおっしゃっていたことの本当の意味が分かったと思うことがある…」と云い出したことがあります。当時、授業の内容を、どこまで学生達の学力に合わせようか迷っていた私が、「大学の授業っていうのは、そういうものですよ」と応じると、佐藤さんは即座に「そうだよ、そうじゃなきゃ、大学の授業じゃないよ」と云ってくれました。生涯、心理学を専門に研究し続けた人間が、講義を聞いてから半世紀近く気に掛け続けて、漸くその真価に気付く…、それだけの深みのある情報が含まれていなければ、大学の講義とは云えない。この言葉は、私にとって大いに励みになり、同時に重い宿題になりました。

佐藤さんは、帝京では《好子》とか《嫌子》という言葉を使って講義をしていました。私は、この種の用語には反対で、今の所、伝統的な用語を使っていますが、流石に同じ学科で実験行動分析学を教える教員が、同じ概念を違う用語で教えては学生が混乱するだろうと思って、相談したことがあります。「そんなこと気にする必要ないよ。あなたは今迄の用語で授業して下

さい」と云われました。そう言えば、一足先に天国に行かれた永瀬先生も伝統的な用語で講義されていたようです。この時期の帝京の学生達には迷惑だったかも知れませんが、こういう鷹揚さは間違いなく佐藤さんの大きな魅力の1つだったと思います。永瀬さんは、学生時代に佐藤さんの《黄色い本》（注4）を読んで実験行動分析学を一生の専門にしようと決めたと言っていました。今頃は2人で思う存分、実験行動分析学を語り合っていることでしょう。

まだまだ、佐藤さんに教えて貰いたかったこと、聞いて貰いたかったことが残っています。その意味で、永瀬先生を少し羨ましく思っても失礼にはならないでしょう。例えば、周知のように B. F. Skinner の創り出した実験行動分析学には、当時一世を風靡していた C. L. Hull の心理学に対する批判があつて、それが初期の実験行動分析学の性格に少なからず影響を与えています。その影響が、どの程度だったのか、どのような形で現れたのか? Hull と Skinner の両方を深く学び、心理学の潮流が Hull から Skinner へ移り変わる時代に実際に居合わせた佐藤さんには是非、聞いてみたかった。例えば、徹底的行動主義では、直接経験を言語行動の所産と看做すわけですが、最近、この直接経験と間接経験の区別が気になっています。W. Wundt は何故、直接経験と間接経験の対比の内に心理学を定義しようとしたのか…? リアリズム対インストゥルメンタリズムの問題は、実験行動分析学のプラグマティズムとどのような関係するのか? 佐藤さんの意見を聞いてみたかったのですが、もう少し自分で勉強してから、と思っている内に機会を失ってしまいました。

とりとめのないことを、思い付く儘に書き連ねました。御冥福をお祈り致します。

<注>

(1) クレタ島: 2010年9月に、欧州行動分析学会の第5回年次大会がギリシャのクレタ島のレシムノという町で開催された。

(2) ジャネットとトマナリ氏: Dr. Janet Twyman と、サンパウロ大学の Dr. Gerson A. Y. Tomanari。

(3) 横山先生: 横山松三郎。慶應義塾大学心理学研究部の創設者。

(4) 《黄色い本》: 『行動理論への招待』(佐藤, 1976) のこと。カバーが黄色いので佐藤さんは《黄色い本》と呼んでいた。因みに『行動分析学入門』(杉山・島宗・佐藤・マロット・マロット, 1998) は《青い本》。

佐藤先生の思い出

遠藤清香（山梨学院大学附属小学校）

佐藤先生との出会いは 1992 年、大学 2 年生のときである。慶應義塾大学の心理学専攻で「行動分析学 I」の授業を履修した。その授業では、強化や三項随伴性、言語行動、ルール支配行動など、行動分析学の基本を教わった。私は、すべての行動を三項随伴性で分析しようというシンプルかつ徹底した考え方に惹かれ、次の年、佐藤ゼミに入った。それから修士を修了するまでお世話になり、その後は、佐藤先生の親友の一人であるオハイオ州立大学のヒュワード先生のもとに留学させていただいた。

佐藤先生のゼミでは、いろいろなことを教えていただいた。私があまりに勉強不足な状態でゼミに入ったため、先生に「最近の学生はいつまで何を知ってるのか？知ってることを言いなさい。」と言われて言葉に詰まったことがある。そんな私に、先生は、アリストテレスの哲学からはじまって、科学とは何かなど話して下さった。他にも、JABA を中心とした文献のクリティカルリーディングの仕方、実験計画の立て方、データ分析の方法など、さまざまなことを教えていただいた。後に私が留学したときに、ヒュワード先生から「清香の行動分析の知識はとても strong だ。方哉にもらった財産だ。」といっていたのを思い出す。

大学 4 年のとき、卒業論文を書いた。提出の締め切りはたしか 1 月 15 日だった。データは取ったものの執筆が全然すすんでいなかった私は、12 月のある日のゼミで、先生に、「すみま

せん、全然書いていないので、先生に見せられるのありません。」と怒られるのを覚悟で言った。そのとき佐藤先生は「人間は、締め切り前にならなければ行動しませんから、やってもなくても、人間行動の本質から見れば当然ですよ。」とおっしゃって、お咎めは全然なかった。やっぱり佐藤先生、今思い返しても、行動分析的に全然ブレていない先生である。

佐藤先生は行動分析以外の分野の本も出版なさっているが、ある日のゼミで、行動分析の推理小説を書きたいとお話になったことがあった。その推理小説、その後どこかで出版されているだろうか？どのような推理小説かというと、刺激性制御がトリックになっている小説だ。先生はトリックの内容も詳しく話してくださって、その内容は、これまで聞いたことのない斬新なものだった。推理小説ファンだった私はすごくワクワクしたのを覚えている。その小説、先生がまだどこにもお書きになっていないなら、私がいつか書かせていただきたいので、詳しいトリックについてはここでは秘密にしておく。

葬儀の際、佐藤先生が学校を作りたいとおっしゃっていたという話があった。私も、ゼミ生だったころ、若気の至りで「学校を作りたいです！」と先生に話したことがある。そのとき佐藤先生と意気投合し、私が学校を作って先生に理事長になっていただくと話したか、それとも先生が学校を作って私を理事長にしてくださると言ったか、どちらだったか忘れたけれども、

そんなことを言いながら飲み会で盛り上がったことを思い出す。

佐藤先生との出会いから 18 年、その間、先生から直接師事していただいたのは 5 年間。たった 5 年間かと自分でもびっくりするほど、先生に教えていただいたことは今でも私の考え方の土台になっている。卒業後私は新設の小学校に

職を得て、学校づくり・カリキュラムづくりの毎日を送っている。先生に、その学校を見ていただく機会をもてなかったのが残念だが、これからはがんばっていこうと思う。

佐藤先生、たくさんのことを教えてくださって本当にありがとうございました。心よりご冥福をお祈りします。

日本行動分析学会第 28 回大会を開催して

権藤眞織（神戸親和女子大学）

いつものようにパタパタと学内を歩いていたら、吉野先生とすれ違い、「来年度、行動分析学会の年次大会、親和でするから！権藤さん、準備委員会の事務局長！！（指さしー）」

「へっ！？！」し、しかし、本学では学会員、先生と私のたった 2 人・・・ぼっち……。で、できるんですかぁ～との叫びもむなしく、「もう、決まったから♪」と吉野先生は楽しそう……。常任理事の中島先生（関西学院大学：年次大会の委員）からも、当日の運営などに関しては関学の院生などもサポートできるとのことで、どうやら、今後、年次大会をなるべくコンパクトに実施していくためのモデルケース（少人数でできる大会運営）としてやってみたいとのことでした。結果としては、吉野先生の甚大なるご尽力で無事に終わることができました。

今年度の行動分析学会は、2010 年 10 月 9 日・10 日の二日間に、神戸親和女子大学との共催という形で開催し、翌日の 11 日に教育セッションを実施しました。大会参加者は、予約者 193 名、当日参加者 244 名で、合計 437 名と例年並みのご参加をいただきました。また、翌日の教育セッションでは、会場との関連で参加をお断りせざるを得ない方も多数おられました（当日は祝日でしたが通常授業が行われており教室の確保が困難でした）。杉山・山本両

先生でのべ 240 名を越える受講者となりました。行動分析学、応用行動分析のニーズの高まりが強く感じられます。今回は、大学からも多大なる協力を得て実施することができましたが、本学では夏季休暇中は通信教育部のスクーリングや教員免許更新の講習会が実施されるため、大会の時期を秋にずらさざるを得ませんでした。開催時期が例年と異なること、また本学は神戸といっても、神戸の僻地（避暑地？他の神戸地区と気候も若干異なります）とあだ名されるところなので地の利がよろしくないこと、この 2 点については会員のみなさまには大変ご迷惑をおかけしました。

大会の準備については、吉野先生が大会の主な部分をご判断して進めてくださったので、ご指示いただいたことをお手伝いさせていただく形でできました（本務との両立が難しく、ご迷惑をおかけすることが多々ございましたが……）。そうこうするうちに、8 月も下旬になり、大会の準備も佳境に入ってきて、配布冊子の原稿をあと 2、3 日で仕上げて印刷業者に提出するという時期となりました。いつものように、朝、関西人にはおなじみの「ありがとう浜村淳」を聞きながら、車で大学に向かっていました。朝の中心トピックとして、京王新宿駅での事故が取り上げられており、私自身も東京に住んでい

たときにラッシュ時に件の駅を 1 カ月ほど継続して利用したことがあったので、ホームの面積と利用者数との不釣り合いさや人の動線がむちゃくちゃに錯綜していることを思い出し、「大変な事故が起こってしまったものだ」とそのニュースが強く印象に残っていました。午前中、午後からの大会の打ち合わせに間に合わせるべく必死で作業を進めていたら、吉野先生が研究室にお見えになって、「大変なことが起こった」と佐藤先生の訃報をお知らせくださいました。その時に初めて、浜村淳で聞いたニュースが佐藤先生の事故であったことを知りました。2 人とも作業停止というか、思考停止状態に陥り、中島先生と連絡を取らせていただきながら、「大会のプログラムの変更が必要かもしれない」→「自分たちだけでは決められない」→「理事会におはかりしていただく」ということだ

け、かろうじて決めることができました。9 月上旬の理事会で、大会ではプログラムは変更せず、追悼のお品を展示するスペースを設けることが決まりました。その後原稿の修正、印刷となりましたので、プログラム及び抄録集の送付が遅くなってしまい、大変ご迷惑をおかけしました。申し訳ございませんでした。

今回の大会は、学内学会員 2 名という心細い状態でスタートしましたが、多くの方のご協力やご支援で、大きな支障もなく無事に大会を終えることができました。私自身は、大会の運営や大学内での物事の進め方について多くを学ぶことができ、貴重な経験をさせていただきました。本当にありがとうございました。ご参加いただきましたみなさまにも心よりお礼申し上げます。

学会実践賞を受賞して

藤坂龍司（NPO 法人つみきの会 代表）

このたびはたいへん名誉ある賞をいただき、まことにありがとうございます。思いがけずいろんな方からお祝いの言葉をいただき、この賞の重さを実感しているところです。

つみきの会は自閉症療育法としての応用行動分析（ABA）、特に今年亡くなられた O.I. ロヴァース博士が開発されたいわゆるロヴァース法の実践と普及を目的とする、親と療育関係者の会です。2000 年に兵庫県明石市で発足し、今年、10 周年を迎えました。現在、正会員が千人を超え、全国に 9 つの支部を持っています。

代表の私は、元々 ABA とも自閉症療育とも無縁な、法律学の短大講師をしていました。それが 1997 年に当時 2 歳の娘が「自閉傾向」と診断され、その直後にたまたま読んだキャサリン・モーリス『わが子よ、声を聞かせて』をきっかけに、この世界に足を踏み入れることにな

ったのです。

私はこの本で、ロヴァース博士という方が、「行動療法」という方法で自閉症療育に画期的な成果を挙げていることを知りました。そこでわが子にもぜひその療育を施したい、と考え、ロヴァース博士の著書を取り寄せて自宅で妻と二人で家庭療育を始めたのです。

頼りになる専門家を見つけることができなかったのも、最初はとても不安でしたが、博士の著書になるべく充実した療育を行なうことで、それまで全く言葉がなかったわが子が、わずか 2 週間で音声模倣をしてくれるようになりました。その時の感激は今も忘れられません。

ロヴァース博士はその著書「ザ・ミーブック」で、「親はセラピストになれるし、なるべきである」ということを力説されています。専門家の数はあまりに少なく、ひとりの子どもに十分な

時間をかけることはできません。親ならば、毎日子どもと生活を共にして、1年365日をわが子の療育に費やすことができます。親を信じて療育の責任を任せなければ、子どもの十分な進歩は望めないのです。

私はロヴァース博士のこの考えに大変感銘を受けました。そこで2000年、わが子が幼稚園に入り、家庭療育が一段落したのを機に、一念奮起して周囲の親たちに「一緒にABAをやりませんか」と呼び掛け、このつみきの会を立ち上げたのです。

現在、つみきの会の親たちは、「ザ・ミーブック」をベースに作成した会独自のマニュアル「つみきBOOK」をテキストとして家庭療育を行なっています。全国各地に散在して孤独に療育を行なっている親たちを支援、挫折を少しでも減らすため、つみきの会はさまざまな手段を講じています。

まず各地の定例会では、私が拙いながら会員のお子さんを相手にABA療育を毎回実演し、ミニ講義も行なっています。定例会は親同士が知り合い、肉声で互いに励まし合う貴重な場でもあります。

次に会合に出て来れない親御さんのために、会員専用のメーリングリストを運営しています。

ここで家庭療育でのつまづきや学校でのトラブルなどについて相談することができます。最近ではmixiのコミュニティも立ち上げました。

さらに家庭療育を行なう親を支えるため、つみきの会では独自にABAセラピストを育成し、会員家庭に派遣し始めています。現在、30名あまりのセラピストが関東、東海、関西を中心として活動しています。今後、徐々にセラピストの数を増やし、「親単独の療育」から「親とセラピストによる共同療育」にシフトしていきたいと考えています。その方が挫折が少ないことがわかってきたからです。

現鳥取大学大学院教授の井上雅彦先生には、前任の兵庫教育大学時代に大学院に社会人入学してお世話になりました。その縁で現在はつみきの会の顧問として、私の運営が「暴走」にならぬようチェックしていただいています。そのほか、この10年の間に応用行動分析を専門とする多くの先生にお世話になり、貴重な知識や助言をいただきました。この場を借りて感謝申し上げます。

今後とも応用行動分析の基本に忠実に、若い親御さんたちの支援を続けて行きたいと思っています。どうか温かいご支援をお願いいたします。

<J-ABA2010 大会参加体験記>

行動分析学を学ぶということ

八木 広大

(大阪市立大学大学院文学研究科人間行動学専攻心理学専修)

今年の行動分析学会は、10月9日、10日に神戸親和女子大学にて開催されました。私自身は、学会への参加は今回で2回目でしたが、行動分析学会については今大会が始めての参加となりました。拙い文章ではありますが、今大会での体験を報告させていただきます。

初日はあいにくの雨でしたが、会場は大勢の人で賑わっており、活気の溢れる空間となりました。今大会のテーマが「教育場面における子どもたちとの関わり」ということで、この日はケーゲル先生の特別ワークショップを初めとして、教育や臨床に関するシンポジウムが多

く企画されていました。私の専門が基礎系だということもあり、同じ行動分析学という名前でもその幅の広さに改めて驚くとともに、自分の研究がまだまだ実践に繋がるはつきりとしたビジョンを持たないことを痛感させられました。ポスター発表に関しても、やはり応用系の研究をなさっている方が多かったと思います。他の学会では、発表抄録集での行動・学習心理学のページの薄さを見て複雑な思いに駆られるものでしたが、今回、その中でもこのような基礎研究の少なさを見て、自分ももっと努力しなければ、と決意を新たにするものでした。

決意よりも実際に行動を変えよう、ということと張り切って臨んだ 2 日目のポスター発表でしたが、やはり学会発表の経験が少ないこともあってか、朝から緊張し通しでした。見知った先生方も少なく、所在無くうろついていた前日の懇親会のイメージが頭をよぎり早速心が折れそうになりましたが、幸いにも様々な先生方が発表を見に来てくださり、また貴重なコメントをいただきました。私自身が十分な応答ができたかどうかは定かではありませんが、研究内容の具体的な展望だけでなく、研究を行っていく動機付けとしても非常に有意義な時間をいただきました。感謝の言葉ありません。

2 日目の午後からは、大河内先生、中嶋先生、武藤先生によるトークセッションを拝聴させていただきました。アカデミックな話題に限らず、先生方の出自から学生時代の思い出、そして今に至るまでと、異色のトークセッションでした。さらには、それぞれの研究テーマだけではなく、行動分析学という領域全体に対する考えについて熱く語っていただきました。誰もが関係する事柄でありながら、論文や書籍ではなかなか目にすることの無いこういった話は、直接お話を伺える学会ならではの貴重な機会でした。普段は自分の研究のことで精一杯で、そういった広い視野をもたなかった私にとっては、展望が開けたような思いでした。そして、私はまだ修士課程ですが自分も同じようにこの長い道のりに足を踏み入れているのだと思うと、不安と高揚で身震いがするような気持ちでした。この大会を通して、自分にとって内的にも外的にも有益な経験ができたと思います。

最後に繰り返しになりますが、今回貴重な経験の場を頂きましたこと、さらには当日お世話になりました皆様方、本当にありがとうございました。この場をお借りして、改めて厚く御礼申し上げます。

<J-ABA2010 大会参加体験記>

学会という強化随伴性

佐々木銀河（筑波大学大学院人間総合科学研究科）

10 月 9-10 日に神戸親和女子大学で開催された年次大会に参加しました。自分は行動分析を学び始めたばかりで学会参加も 2 回目という”初学者”ですが、その視点から今回の学会の印象を書かせて頂きます。

今年の開催地が神戸だと聞いて「神戸＝都会」と考えていましたが、駅を降りれば目の前には見上げるほどの急な坂。『そうか、この坂を越え

ないと学会で発表することはできないのか！』と一人勝手に思いながらも、バスに乗って楽々 5 分で到着しました。静かで勉強しやすそうな大学だというのが第一印象でした。

学会中、特に印象に残った事柄として、自分にとって初のポスター発表と 1 日目に行われた Koegel 先生夫妻の PRT(機軸行動発達支援法)に関する特別ワークショップがありました。

ポスター発表は前日から非常に緊張していました。今回は「自閉性障害児の好みのアセスメント」に関する研究を発表させてもらいましたが、初めてで拙い説明しかできませんでした。それでもフロアーの皆さんは熱心に聞いてくださり、鋭い質問や指摘を頂くことができました。中には「この研究、面白いですね」と言ってくださる方もいて、その一言で発表して良かったと思えました。話を重ねる度に、最初の緊張は消えて『面白いと言ってもらえなくてもいいから、もっと多くの人に意見をもらいたい!』と思い、後半は発表時間ギリギリまで積極的に自分から話しかけるようになっていました。これを行動分析的に考えれば、自発的な発表行動がフロアーの皆さんの貴重な意見という好子出現によって強化されたのかもしれませんが、『次回もまた何か発表したい! 研究頑張ろう!』と思えるほどに自分にとっては強力な好子でありました。そして、Koegel 先生の特別ワークショップについてです。恥ずかしながら自分は「論文でよく名前を見かける先生」という程度の知識しかなく、PRT についても詳しく知りませんでした。今回のワークショップでは PRT の基本的な概念から始まり、機軸行動についての話(特に「動機づけ: motivation」と「自己始発: self-initiate」に重点を置いて)、PRT の実際の介入法、DTT との違いなどについて、過去に蓄積された研究の

紹介や実際の介入の映像を交えながら解説して頂きました。基本的には Lynn 先生から話をさせて頂きましたが、実践家である Lynn 先生の話は、PRT を詳しく知らなかった自分にとっても非常に分かりやすいものでした。また、ワークショップの質疑応答で Robert 先生が『PRT は DTT である』とおっしゃっていたように、DTT から始まる多くの研究の積み上げが今の PRT を構成しているのだと教えていただきました。これまで自分は日本の研究を知ることによって精一杯でしたが、今回のワークショップを通じて、海外にももっと目を向けなければと思われました。自分は学会参加の経験は少ないですが、今回の学会ではフロアーの方の意見に発表行動が強化され、ワークショップによる新しい知見に学習行動が強化されるなど、自分の行動が高密度で強化されたので参加して良かったと思いました。これは行動分析学会だからこそその強化随伴性であったのかもしれないと書きながら感じています。ありがとうございます神戸。ありがとうございます行動分析学会。(十分注意を払っていますが、本文中の用語は自分が”初学者”であるため、誤用されている可能性もあります。その場合は学会で見かけた時など御遠慮なく指摘してください。それも自分にとって好子です)。

<連載：海外で学ぶ学生、海外で働く専門職>

Over Time: 最初の一步とその延長線上にあるもの

黒田敏数(West Virginia University)

私は West Virginia University (WVU)に通う大学院生です。専門は動物を使った基礎研究で、Dr. Andy Lattal が私のアドバイザーです。主な研究のテーマは”因果関係”で、現在、Causality-detection、Molar-molecular issue、Response-reinforcer dependency、言語行動に関す

る実験をしています。博士論文の実験では、どのような変数が時間的に離れた因果関係の検出の正解率に影響を及ぼすのかという問題を扱っています。

私の所属する Lattal 研究グループの特徴は基礎研究の基礎とも言うべき哲学的な問題をよく

議論するところです。メンバー全員と週一回のペースで行動主義が生まれるまでの経緯、行動分析と他種の行動主義との関係、認知心理学との関係、生物学との関係を話し合います。もう一つの特徴は海外からのメンバーが多いところです。私の在籍中だけでもフランス、メキシコ、ブラジル、ベネズエラ、コロンビア、ヨルダン、そして日本からのメンバーがいました。母国語も文化も異なる人達が集まって哲学的な議論するのはとても刺激があります。

WVU の行動分析プログラム全体としての特徴は、他の研究グループとの交流が盛んなところです。他の研究グループに参加することが奨励されていて、大学院生はそれぞれ好みの研究題目を基礎、応用を問わず選んで学ぶことが出来ます。もう一つの特徴は、学んだものを下級生に教える機会が多いところです。学部生の授業を受け持ったり、研究グループメンバーの学部生の卒論研究の指導を任されたりします。アドバイザーとの研究に併せ、それらの経験から学べることに多様性があり、私自身とても貴重な時間を過ごせていると思っています。しかし私の場合、初めから行動分析を学ぶことが目的で留学したわけではありませんでした。それ以前に心理学そのものの教育を日本では受けてはいません。それは渡米したのが中学校を卒業した直後だったからです。

留学当初の目的は、中学生の頃(実家は大方です)から憧れていた映画製作の技術を学ぶことでした。高校留学中には撮影、編集などの初歩的な技術を学びました。初めの 1-2 年間は楽しくやっていたのですが、少しずつ重圧を感じるようになっていきました。"憧れ"という動機だけで、それをバックアップするものが才能的なものも含め自分には無いことに気付いたからです。アメリカに來たことを正直後悔しましたが、自分が決めたことだから逃げられませんでした。葛藤だけが延々と続く中、何の成果も出せないまま憧れは次第に薄れていき、そんな自分の決断の甘さ、未熟さを悔み、高校卒業後は帰国を

検討していました。

しかしそんな時期に転機が訪れます。まだ映画制作のことを完全に諦めきれていなかった私は何か勉強になることがあるかもと、一時帰国中に地元にある演劇グループの方々と知り合いになりました。そしてそのグループにいた一人の女性との出会いが心理学に興味を沸くきっかけとなりました。当時その方は病院で栄養士をしていたのですが仕事柄、相談を聞くのがとても上手な方でした。その方と話しているうちに、自分もこんな風にカウンセリングの仕事をしてみたいと思うようになっていきました。留学の目的を見失いかけていた当時、それを学ぶことは新たな目標へと変わっていきました。そしてそれまで身に付けた英語力を活かせるように、アメリカに残り大学へ進学し心理学を学ぶことを決意しました。

通った高校の近くにある 2 年制大学を心理学専攻で卒業し、それから 4 年制大学(Utah State University)へと編入したこともあって大学には計 5 年間在籍していました。そのうち初めの 4 年間は臨床心理学に的を絞って勉強しました。授業外では実践経験を積むために様々な問題を抱えた子供たちが集まる施設でボランティアをしたり、臨床心理学者の指導の下、カウンセリングセンターで実際にクライアントと接するというとても貴重な経験もしました。また卒業論文では児童虐待に関する研究もしました。

当然、将来は臨床心理学の道を進むことを志していたのですが再び転機が訪れます。大学生活 4 年目が終わった後の夏、友人の勧めで学部 1 年生の必修科目の授業を聴講しました(私は編入扱いされていたので、その授業を受けてはいませんでした)。それが恩師である Dr. Carl Cheney、そして行動分析との出会いでした。それまで"心"という概念を前提に心理学を学んできたので、行動だけで心理学が出来るという彼の信条に非常に興味が沸きました。聴講していただけのはずがいつの間にか受講していた生徒以上に議論に参加するようになり、さらに彼の

研究室では実際に動物を使って **Shaping** をさせてもらいました。もっと行動分析を学んでみようと、その年の秋は別の行動分析の授業を **Dr. Amy Odum** から受けたり、行動分析を専門に学ぶ学部生のミーティングに参加したりしました。

行動分析にとっても興味があったのは確かなのですが、大学院へは臨床心理のプログラムに応募しました。それまでの努力を無駄にしたくなかったというのもありましたが、それ以上に過去の経験から途中で逃げ出すことをしたくなかったからです。しかし応募した全ての臨床心理プログラムに入学拒否をされてしまいました。凄く悔しかったのを覚えています。でもそのことが逆に行動分析を学んでみたいと素直に思うきっかけになりました。それを **Dr. Cheney** に話すと、彼は"それじゃあ行動分析のプログラムに応募してみたらどうだ?"と言ってくれました。**Dr. Odum** も彼の提案に賛同してくれました。応募する大学院を調べていたときには、行動分析プログラムを完全にリストから省いていたため、私は"大学院では誰と研究すればいいのか?"と **Dr. Odum** に尋ねました。すると彼女は迷わず "**Andy Lattal**"と答えました。それが誰かもわからなかったけれど、彼女の言葉を信じ **Dr. Lattal** のいる **WVU** の行動分析プログラムに応募しました。すると面接への誘いがありました。他の応募者に比べ行動分析の経験の乏しかった私は当然受かるとは思っていなかったもので、面接中は非常に楽な気持ちでいられました。それが功を奏したのか大学院から入学許可が降り、私はこのプログラムに入ることになりました。それは行動分析を知ってから 1 年足らずでの転身でし

た。

大学院では困難にぶつかることが多々ありますが、それも留学という冒険の醍醐味と捉えながら向き合っています。何よりも嬉しいのは、言葉、文化の違いを超えて分かり合える友に囲まれていることです。彼らと一緒にいるからこれまであった困難も乗り越えられてきたし、それが良き思い出へと変わってきました。そういった意味でとても楽しい時間を過ごせています。

一見、私の留学経験は一貫性がないように見えるかもしれませんが、しかし実際は節目節目でそれまでの経験が重要な役割を果たしていて、過去と現在はきちんと一つの線で繋がっているのです。最初の一步が無ければ今は無かった。だから、途中で諦めてしまったけれども留学当初の志はとても価値のある一步だったと思います。

私は毎年 **ABAI** に参加しています。**ABAI** に来られた時は是非お気軽に声を掛けて下さい。



Local Beer SIG が結ぶご縁

山本 華奈子 (Mt. Diablo Unified School District)

Local Beer SIG についてお話する前に、行動分析学との出会い、ABAI への参加の経緯をお話させていただきます。私が初めて行動分析学に出会ったのは、留学先アメリカのカリフォルニア州立大学フレズノ校心理学部で、当時唯一の行動分析家であった Criss Wilhite 教授の授業がきっかけでした。他の心理学のクラスでは何か物足りなさを感じていたのですが、その行動分析入門クラスは「これだったんだ、私の学びたかったものは！」とじっくりきた感じがしました。さらに、そのプログラムのインターンシップを通じて初めて自閉症を持つお子さんやそのご家族と触れ合う機会を得て、行動分析学に基づいた指導法によってどれだけその子どもたちの行動が変わっていくかを目の当たりにし、すっかり魅了されてしまいました。大学卒業後、修士課程に進む前に本当にこの分野で生きていきたいのか実地で見極めたかった私は、カリフォルニア州の特別支援教員免許課程で学びながら、サンフランシスコ・ベイエリアの特別支援学校 Spectrum Center と STARS School(Behavior Analysts, Inc.)でそれぞれ 3 年間と 2 年間、自閉症児教育に携わってきました。そして、現在は同じくベイエリアの Mt. Diablo Unified School District という公立学校区の一小学校で、自閉症児の特別支援学級を受け持っています。

特別支援学級の担任

という立場で、5 日間に渡って行われる ABAI に参加するのは、分野の人手不足もあってなかなか難しいことでした。そんな中、2003 年に ABAI がサンフランシスコで開かれたので、週末 1 日だけ参加できました。その時のポスターセッションで奥田健次先生にお目にかかったことが、日本の行動分析を知るきっかけになりました。それまで日本の行動分析学や学会のことも知らなかった私ですが、奥田先生にいろいろとお話を伺いながら、いつか日本で行動分析のフィールドで働けたら、と思いました。

それから 4 年後、サンディエゴでの ABAI にて奥田先生に再会することができ、その時の ABAI Expo の J—ABA ブースで杉山尚子先生にもご紹介頂きました。杉山先生に日本行動分析学会の年次大会のことを伺い、その夏には初めて立教大学での大会に参加させて頂きました。その時は正直、日本語の行動分析の専門用語の難しさに驚きました。それからというものの、ABAI Expo の時に頂いた島宗理先生の書籍を読



みながら、少しずつ日本語の専門用語を勉強していきました。それ以来、毎年の ABAI は私にとって、日本人の行動分析家の方々とお会いできる貴重な場となりました。

翌年 2008 年、シカゴでの ABAI では、当時 Behavior Analysts, Inc. で共に働いていた竹島浩司さんを通して、杉山先生のご発案による「近隣のブルワリー（醸造所）に地ビールを飲みに行く会」へのお誘いを頂きました。それまで日本の先生方、学生さんたちとの交流はなかった私は、これはネットワーキングの良い機会だと思い、緊張しながらも喜び勇んで出かけました。そこで、関西学院大学の野田航さんや田中善大さんとも、日米の教育現場の情報交換をすることができました。オハイオ州立大学の糸井まどかさんとの交流が始まったのもこの時からでした。

その翌年の 2009 年はアリゾナ州フェニックスでの ABAI ですが、「地ビールを飲みに行く会」も更にグレードアップし、杉山先生が

「Local Beer SIG (Small Interest Group)」と命名されました。幹事をなさっているカンザス大学の

林祐介さんとウェストバージニア大学の黒田敏数さんが前もって探してくださったブルワリーへ、タクシーに分乗して向かう際、その手際よさ、そして参加者全員の協調性に、さすが日本人の行動分析家は違うと、感動しました。

そして、今年 2010 年の ABAI は、テキサス州サンアントニオで行われました。今年の Local Beer SIG は一段と事前準備が整っていて、まだ ABAI が始まる前から杉山先生からのお知らせのメールが届いていました。昨年に引き続き、素晴らしく綿密な計画とチームワークに感銘を受けました。そのような杉山先生や幹事／リーダーの方々のご尽力の結果、今年は 34 名もの参加者があり、過去最多の盛大な会だったと思います。

日本の行動分析の分野で勉強したり働いたことのない私にとって、ABAI Expo やポスターセッションなどで日本の先生方や学生さんたちと出会い、Local Beer SIG で更に語り合う機会が持てるのは大変貴重です。毎年の ABAI でのネットワーキングの収穫は大きく、昨年夏には関西学院大学の松見淳子先生のゼミに伺い、ゼミ生の



皆さんがご活躍されている小学校や施設を見学させて頂くことができました。同年秋には、大対香奈子さんたちが私の勤めている小学校に見学に来て下さいました。

今年の夏には、奥田先生からのご推薦により、法政大学の島宗先生のゼミの見学に伺ったり、先生が立ち上げられた徳島のABA研究会のサマースクールにも参加させて頂き、大変刺激を受けました。又、毎年のLocal Beer SIGでお会いした是村由佳さんのご紹介により、慶應義塾大学の山本淳一先生のゼミや「早期発達支援研究会」にも招待して頂き、貴重なお話を伺うことがで

きました。この場をお借りして、各先生方とその門下生の皆様に深くお礼申し上げます。

最後になりましたが、このような素晴らしいネットワーキングの機会を作ってくださった杉山先生を初めとする、日本行動分析学会の皆様にも深く感謝致します。これからも、この Local Beer SIG を通して、ますます多くの新たな交流が生まれ、それぞれの暮らす環境の中で行動分析をもっともっと広めるという使命を持つ者同士のネットワークが更に広がっていくことを切に願います。

自主公開講座報告：

支援ツールを活用した特別支援学校からのチャレンジ

平澤紀子（岐阜大学大学院教育学研究科）

日本行動分析学会様のご後援をいただき、標記の講座を平成 22 年 10 月 30 日(土)10:00-12:00 に、岐阜大学教育学部 B107 教室で開催いたしました。特別支援学校や小中高等学校の教師、保護者、学生の 125 名が参加されました。

特別支援教育においては、障害のある子どもの生きる力の育成が求められています。そのためには、周囲の私たちができる状況をつくり、環境を整備することが不可欠です。

そこで、今回の講座では、香川大学教授の武蔵博文先生から、障害のある子どもの生きる力を高めるための基本的な考え方を踏まえた上で、富山大学附属特別支援学校における研究、実践をベースに開発されたチャレンジモデルについてお話いただきました。チャレンジモデルは、行動分析学を基にした障害のある子どもが主体となって、自ら環境に働きかけ、手応えを得て、

様々なことに挑戦していくことを支える包括的な支援です。その中で、支援を形にして実行する支援ツールは、障害のある子どもや周囲の人々が、そのままの生活において、好循環を生み出す仕組みとなることを学ばせていただきました。環境との相互作用の中で生じる「障害」に対する行動分析学のアプローチの特徴やその成果について、参加者と共有できたものと思います。

このような講座がもてましたことに、あらためて感謝申し上げます。岐阜大学教育学部特別支援教育センターでは、毎年、学部公開講座において、行動分析学の最前線をお届けする企画を開催しています。今後とも、学会ならびに会員の皆様のご協力をいただきたく、宜しくお願いいたします。

ローラ・シュライブマン博士をお迎えして：

PRTの基礎と実践を学んだ日々

加藤愛理（慶應義塾大学社会学研究科心理学専攻）

2010年8月18日から、私たち慶應義塾大学心理学研究室では、特別招聘教授としてカリフォルニア大学サンディエゴ校(University of California San Diego:UCSD)のLaura Schreibman先生をお招きし、3日間にわたる集中講義とその後1日の公開講座を行って頂きました。Schreibman先生と言えば、基軸行動指導法(Pivotal Response Teaching : PRT)の開発者として、また、米国の自閉症研究拠点大学(Autism Center of Excellence: ACE)として認定されているUCSDにおける発達支援研究の統括研究者として、数々の実績をあげておいでになる大先生。そのような先生をお迎えするとあり、研究室をあげて全力疾走した日々でした。今回は、その4日間をご報告致します。

8月16日、まず私たちゼミ生に与えられたミッションは、Schreibman先生ご夫妻を空港でお迎えし、ホテルまでお連れすることでした。私含めお迎え担当の2人はほとんど英語が話せず、先生の良いお話相手になることができなかったのですが、ご夫妻は本当に優しく気さくで、常に笑顔でいて下さり、なんとか無事にホテルまでお送りすることができました。

8月18日～20日の3日間で開講された集中講義は、自閉症のスクリーニングと診断、脳科学と自閉症、PRTの基礎、個別の特徴に合わせた行動的介入、PRTのクラスルームでの運用を主なテーマに、先生の最新の研究成果を含めながらお話をして頂きました。また、実際に私たちゼミ生が子ども役とセラピスト役に分かれてロールプレイをし、それに対してSchreibman先生からフィードバックを頂くという非常に貴

重な実践のトレーニングの機会も得ることができました。加えて、毎日順番でゼミ生が自分の研究についての発表をし、先生から様々なご指摘とアドバイスを頂く時間も設けられました。私たちのつたない発表にも熱心に耳を傾け、必ず良い点を見つけて褒めて下さるその姿勢は、真のPRTの実践者だと感じさせられました。



講義中のSchreibman先生

そして、集中講義終了後の21日に行われた公開講座では、一般の方々を含め約60名が集まり、PRTの基本的なレクチャーの後、午後からはSchreibman先生への質問タイムが企画されました。会場からは、子どもが特定の遊びにこだわった場合の対処など、PRTの具体的な方法論に関する質問が多く挙げられ、私たち学生だけでなく、教育現場で活躍されている方や自閉症支援に携わる方々が、PRTの実践的な側面に

触れることのできる講座となりました。

今回の 4 日間で、何よりわくわくしたのは、Schreibman 先生の科学者としての姿勢を反映して、その講義が研究と臨床を行き来しながら展開されていったことです。臨床での気づきや問題をすぐに研究に落とし込み、効果的な支援のためのエビデンスを次々と出していく。その姿勢とスピード感は、私にとって大きな刺激となりました。

私自身の話をさせていただきますと、学部 2 年時に、自閉症のお子さんの家庭療育のアシスタントを始めたことがきっかけで心理学の道へ進んだ者であり、現在は、同じ研究室を卒業した先輩方とともに、家庭療育のアシスタントとなる大学生を養成する活動にも取り組んでいます。効果的な支援を行うために、研究と臨床を行き来できる人材になればと思い、山本淳一先生のご指導のもと修行中なのですが、今回の講義から、研究が臨床を支え、臨床が研究を活性化させる、という研究と臨床の相互の関係と、その両者を行き来することの重要性を改めて考えさせられました。

また、マニュアルや論文からは得ることのできない、PRT の具体的な方法論について学ぶことができたことも、今回の大きな収穫であったと感じています。

先生の講義と公開講座では、PRT 実践場面の映像が多く使用されており、PRT のマニュアルにあるそれぞれのポイントに即して、具体的な方法論を知ることができました。

これまで、PRT のマニュアルや論文を読んだことはありましたが、その方法論を知る機会はなく、良い例と悪い例の映像を用いながらの講義は、非常に実践的で有意義でした。



集合写真の 2 列目、左から二人目が私です

生の PRT に触れて思ったことは、PRT で引き出している行動の多くは、マンドであるということ。セラピストは、とにかく時間あたりに子どもがマンドをする機会を可能な限りたくさん作りながら、ターンテイキングや複合的な手がかりといった方法を瞬時に盛り込み、大人を自発的に見る行動や、様々な刺激に対する反応性を安定させていく。PRT は、検査で測るような知的能力の発達ではなく、自発的なコミュニケーションの促進に効果的なカリキュラムであると身をもって感じました。

少ない臨床経験ではありますが、私自身の現場での子どもとの関わりから、また、これまで受けてきた先輩セラピストや先輩研究者の指導から感じることは、早期療育において集中的に固めるべきは、コミュニケーションの基盤であり、その基盤の上に成り立つ安定した対人相互関係により、主に離散試行型指導法（DTT）で実施されるような知的スキルのトレーニングが、より効果的になるということです。今回の講義を受講し、PRT は、単に子どもと関わる

方法ではなく、コミュニケーション発達のコアとなる部分に焦点を絞り、コミュニケーションの基盤を作ることができる「エビデンスに基づいた」方法であり、自閉症児の療育に大きな発展をもたらすものだという思いを強くしました。

先生をお迎えした4日間は、研究室はまさに「Schreibman 先生一色」でした。過去10年間の先生の論文を全て読むこと、授業と発表の準備、山本先生からの「1人1日2回は絶対に質問をしろ」とのミッション遂行のための準備など、とにかく本当に大忙しでした。そんな中、日比谷公園での盆踊りや院生主催の飲み会にも先生がご参加下さり、インフォーマルな活動も、楽しんでいただくことができました。(Schreibman 先生が、日本酒をぐいぐいお飲みになっていたのも印象的です。)

4日間という短い期間でしたが、そこには多

くの学びがあり、多くの刺激があり、質の高い研究と臨床のためのスキルを磨いていきたいという思いを新たにすることができました。

今後、UCSD と慶應義塾大学で、院生の交流も含めて連携してPRTの研修や研究を進めていくことも決まり、日本における自閉症研究と臨床の発展が期待できるのではないかと思います。

最後に、このような学びの機会を私たち学生に提供するためにご尽力下さった山本先生、また、はるばるアメリカから来て下さり、非常に有意義な講義をして下さった Laura Schreibman 博士に感謝をし、私の報告を締めくくらせて頂きます。

<連載：今こんな研究をしています>

看護師・音楽療法士が応用行動分析学と出会う

松崎敦子（慶應義塾大学社会学研究科心理学専攻）

私は、現在、慶應義塾大学の社会学研究科心理学専攻修士課程（山本淳一研究室）で早期発達支援の研究をしておりますが、社会人としてのスタートは「看護師」として始まりました。当時「きつい、きけん、きたない」の3Kと言われていた看護職ですが、「人を助ける仕事」の代名詞でもある“白衣の天使”への憧れは非常に強く、周囲の反対を押し切り看護師となりました。働き始めた後も、やりがいを感じて仕事を続けていましたが、子どものころから続いていた音楽と医療をつなげる「音楽療法士」の存在を知り、当時最先端の教育を行っていたアメリカへの留学を決意し、カリフォルニア州立大学ノースリッジ校(California State University, Northridge)に入学しました。

勢いだけで飛び込んだアメリカでの生活は

「聞けない、読めない、話せない」の苦しみで、大学の課題で出されたエッセイに「障害のある人の気持ちがわかる」と書いたことを今でもよく覚えています。音楽療法学科の履修科目には、音楽療法の知識と演習、心理学、特別支援教育、研究法などの授業と、4か所の異なる施設（病院や介護施設など）での2年間の実習、そして1040時間のインターンが含まれます。それら全て終了して初めて大学卒業となり、また米国音楽療法学会(American Music Therapy Association)の認定音楽療法士(Board Certified Music Therapist)の受験資格が与えられます。私は音楽療法士の認定資格を取得後、すぐに帰国をしました。帰国後は、知り合いの紹介で自閉症のお子さんに音楽療法を始めたのをきっかけに、現在はダウン症や自閉症のお子さんから老人ホー

ムに入所中のご老人まで、個人で音楽療法を実践しています。

音楽療法士としてお子さんと関わるうえで、私が一番心がけているのは、「お子さんの発達にとって大切な時間を決して無駄にしない」ということです。「無駄にしない」ためには、常にエビデンスに基づく療育方法を、本や論文などでアップデートし、自分のスキルを磨く必要があります。また自分の行っていることが有益だと考えるならば、その効果をデータ化し、社会と共有をする手段である「研究」や「論文を書く」作業は不可欠ではないかと考えるに至りました。

現在は、指導教授の山本淳一先生と「慶應早期発達支援プログラム<KEIP10> (Keio Early Intervention Program 2010)」の開発と、その効果を分析しています。このプログラムは、1歳半からのコミュニケーション発達に焦点を当て、家庭、保育園、子育て支援センター、母子通所施設、児童デイサービスなどで、多くの方に使っていただけるように作成したものです。コミュニケーションに困難を抱えるお子さんに対する早期療育の有効性は、Dawson と Sally-Rogers たちの最新の研究でも明らかになっていますし (Dawson et al., 2010)、また、米国の小児科学会においても、早期からの行動的介入が強く勧められています (Myers & Johnson, 2007)。そういった中で、できるだけ時間的・経済的負担が少なく、お子さんの発達に不安を抱える保護者の方に抵抗なく使っていただけるプログラムの完成を目指し、研究を進めています。

慶應早期発達支援プログラム<KEIP10>は、コミュニケーション発達を促進する 6 つの領域、「注意」「共同注意」「模倣」「受容言語」「表出言語」「対人相互作用」(Yamamoto & Naoi, 2007)に焦点を絞っています。まず、90 項目の行動評価項目からなるチェックリストで行動アセスメントをおこないます。そして、そのアセスメントからお子さんのターゲット行動を明確にし、支援を行います。支援の方法は、チェック

リストの 90 項目にそれぞれ対応して作成されており、「離散試行型指導法 (DTT)」や「機軸行動指導法 (PRT)」などの応用行動分析学の技法が盛り込まれています。日常での遊びや日常生活場面の整備方法、プロンプト・フェイディング、時間遅延法などの支援技術の具体的な適用方法、子どもの動機づけを高める方法などを分かりやすく書いたマニュアルも作成しました。また、カリキュラム構成をあらかじめ決めないという点も、大きな特徴です。上記の 6 つのどの領域からでも実施でき、多くの支援方法のオプションを設定する事で、学習が滞ってしまい先に進まず、親子ともに相互強化がない状態となることを避けたかったのです。活用される全ての方（大人も子どもも、保護者も支援者も）が、強化を受けるプログラムをめざしました。

また、音楽療法士としてのスキルを活かし、「アイコンタクトの歌」「表情や動作模倣の歌」「日常生活スキルの行動連鎖の歌」などの曲や動画も作成しました。私の大好きなファンクのリズムやブルーズ音階もふんだんに使って、楽しみながら行動がスムーズに進むような仕掛けを作っています。

これまでの事例研究の成果は、日本行動分析学会第28回年次大会で、「早期発達支援プログラムはどのように初期コミュニケーションの獲得を促進するか？」と題し発表しました。自閉症傾向とされている暦年齢3歳、発達年齢7か月のお子さんに対し、家庭内で<KEIP10>による指導を行ったところ、非常に短期間で目標行動（注意、共同注意、模倣の下位項目）の習得がなされ、また介入を行わなかった対人相互作用の持続時間が長くなったこともわかりました。この事実は、わたし達にとっても、大きな成果でした。つまり、子どもにとって得意な領域への支援を行うことで、個別的な行動だけでなく、対人相互作用の安定状態が生み出されたからです。それは、発達科学のいうところの「コミュニケーションの引き込み (mutual entrainment, senso

ry-social routine)」や行動分析学が目指す「相互強化」が、「安定状態 (steady state)」として成立したことを示しています。

この事実自信を得て、現在は<KEIP10>の適用可能性を明らかにする研究を進めています。具体的には、このプログラムを、①家庭支援としての保護者指導 ②保育園、子育て支援センター、児童デイサービスでの保育士指導 ③ネットワークを使った遠隔地支援、などの異なる環境に使用し、プログラムの有効性を検証しています。手順としては、それぞれの環境で保育者（保護者または保育士）に3時間のワークショップを行った後、実際に介入を必要とされるお子さんの指導に、セラピストが関わります。短期間での支援によって安定して伸びそうな行動のレパートリーとその可塑性を見出します。その際、保育者の方にはまずサブセラピストとしてお子さんと関わりながら具体的な技術を学んでいただき、その後、実際にメインセラピストとしてお子さんの指導に当たっていただきます。支援の評価は、お子さんの発達評価と保育者の支援技術の評価の2側面から行いますが、それと同時に、支援の及ぼす波及効果（相互強化の確立、保育技術の般化、育児ストレスの低減）などについても、多様な指標を使って検討していきます。

2010年7月10日には、第1回早期発達支援研究会を慶應義塾大学で開催し、研究にご協力いただいている保護者、小児神経科の医師、保育士、発達障害者支援センターの指導員、音楽療法士、大学院生のみなさんと研究会を行い、「現場ではどのようなサービスが必要なのか」「わたし達は何を提供できるのか」を討議しました。研究会は、適宜開催しますので、山本淳一先生のホームページ (<http://www.flet.keio.ac.jp/~yamamotj/>) をご覧い

ただきたいと思います。

日本には、1歳6ヶ月健診の受診率が、91%という他の国にない誇るべき保健システムがあります。また、近年では、自閉性障害の兆候は1歳半で明瞭になるとされています (Robins et al., 2001)。兆候が見つかったから支援を受けられるまでの時間遅延をなくし、すぐに早期発達支援が受けられるような支援システムを構築するというのが、目下の研究テーマです。保育者にとっては最小の負担で、子どもの発達には最大の効果を生むプログラム、「とりあえず様子をみましょう」から「楽しみながら初めてみましょう」と使ってもらえるプログラムの完成を目指し、今後も研究を進めてまいります。

引用文献

- Dawson, G., Rogers, S., Munson, J., Smith, M., Winter, J., Greenon, J., Donaldson, A., & Varley, J. (2010). Randomized controlled trial of an intervention for toddlers with autism: the Early Start Denver Model. *Pediatrics*, 125(1), 17-23.
- Myers, S., M. & Johnson, C., P. (2007). Management of children with autism spectrum disorders. *Pediatrics*, 120(5), 1162-82.
- Yamamoto, J., & Naoi, N. (2007). Systematic and long-term evaluation of behavioral intervention in children with autism. *The 33th Annual convention of the Association for Behavior Analysis, San Diego, May*.
- Robins, D., Fein, D., Barton, M., & Green, J. (2001). The Modified-Checklist for Autism in Toddlers (M-CHAT): An initial investigation in the early detection of autism and Pervasive Developmental Disorders. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 31 (2), 131-144.

自著を語る：『応用行動分析学から学ぶ子ども観察力&支援力養成ガイドー発達障害のある子の行動問題を読み解く！ー』

平澤紀子（岐阜大学大学院教育学研究科）

このたび、みだしの本を出版させていただきました。

私は、園や学校のもつ力はとても大きいと考えています。毎日、様々な学びの機会があり、それを支える先生方のかかわりがあります。同時に、かかわりの中で、子どもの学びを支えていくからこそ、そこに軋轢も生じます。とりわけ、子どもが示す様々な行動の問題を前にして、悪循環に陥ると、子どもの教育的ニーズに届きません。一方、今日、発達障害に関する多くの情報が得られます。熱心な先生方は、研修会に出かけ、有効な支援を得ようとします。でも、そうした努力が、目の前の子どもの支援につながらないようです。

どうも、特別支援教育の根幹である「子どもを見て、支援を考える」ことに立ち返る必要があるようです。先生方は日々、子どもにかかわりながら、よりよい支援を探っています。しかしながら、ともすれば、問題が生じないような後ろ向きな対応や、思いこみやあてはめの支援に陥っています。あげく、この子どもは難しい、自分は指導できないとなれば、子どもも、そして先生方も不幸です。日々の教育実践をより確かなものにするために、応用行動分析学の見方や考え方が後押ししてくれると思いました。それは、先生方が日々行っている「子どもを見て、

支援を考える」ことの裏付けです。

子どもは環境とかかわる中で、育ちます。育つからこそ、思いどおりにならないことも生じます。もし、環境とのかかわりの中で、子どもの行動を観察すれば、行動問題の背景に、子どもがもてる力をうまく発揮できない状況があることが分かります。そうすれば、私たちは、子どもの力を高めるために何ができるかを考えることができます。そして、その支援を行い、記録をとり分析すれば、私たちの支援が願いどおりのものか、そうでないかが分かります。それは、私たちに行った支援の意味や手応えを与え、さらなる子どものチャレンジを支える道筋を照らしてくれます。

先生方とともに、子どもが示す行動問題から教育的ニーズを読み解き、さらなるチャレンジを支えるために、本書では、①子どもの行動を観察する、②ABCから支援を考える、③支援を行い見届ける、④支援を更新する、という4つのステップを解説しました。そして、先生方が園や学校で日々出会う状況に即して、課題を解決していけるような内容を目指しました。願いに力が及ばず、誠に稚拙なことですが、会員の皆様に、読んでいただき、ご指導をいただければ幸いです（学研教育出版 2010 年 8 月）。

『行動分析学研究』 佐藤方哉先生追悼特集のお知らせ

＜編集委員会＞

皆さまにはすでにご存知のことと思われますが、昨夏、佐藤方哉先生が不慮の事故により逝去されました。佐藤先生は日本行動分析学会理事長（1985 年– 1990 年）、国際行動分析学会会長（1998 年– 1999 年）など、国内外の要職を歴任し、長年にわたり、行動分析学の普及・発展に尽力されました。

『行動分析学研究』では、次号（26 巻 1 号、2011 年 7 月末刊行予定）にて、佐藤先生の追悼特集を企画することになりました。佐藤先生が我が国の行動分析学や心理学に与えた影響を先生のご著書や論文から振り返り、考察するかたちの追悼文を学会内外から公募して掲載します。

佐藤先生はペンネームで詩集や音楽 CD を創作されていたことからわかるように、人間に関する幅広い興味と深い洞察を持った心理学者でした。主要論文の一覧からも、研究テーマは刺激性制御から言語行動、パーソナリティから哲学まで展開し、それでいてその根っここのところは「随伴性」という概念でまとめられていたように思えます。佐藤先生への追悼を通して、これからの行動分析学の行く末を展望し、研究や実践がさらに発展するきっかけとなるような特集になればと思います。

追悼文では特定の論文や著書を取り上げていただき、「私はこの本の〇〇に～の影響を受けた」といった個人的なエピソードや、「〇〇という論文はこれから～という研究に発展していくに違いない」といった学問的な解説をご執筆下さい。

原稿は本誌換算で 1～4 ページ (A4 判 40 字×30

行/頁で、1.5～6 ページ) とします。論文執筆には当学会の投稿規定に則ったひな形ファイルを使って下さい。論文の種別は「追悼文」(Memorial) とします。英文抄録は必要ありませんが、英文題目や著者・所属の英文表記はご記入下さい。その他の書式については当学会の「投稿規定」と「執筆の手びき」を参照して下さい。投稿時には「添付表」もご提出下さい。ご投稿いただいた追悼文は編集委員会で簡易査読をさせていただきます（書式や誤字脱字、倫理規定など）。

投稿締切りは 2011 年 2 月 28 日です。投稿や投稿についてのお問い合わせはメールで『行動分析学研究』編集事務局 (editor@j-aba.jp) までお願いします。

各種書類や書式は以下から閲覧/ダウンロードが可能です。

・投稿規定：

<http://www.j-aba.jp/journal/contribution.html>

・執筆の手びき：

<http://www.j-aba.jp/journal/writer.html>

・本文のひな形：

<http://www.j-aba.jp/journal/template.doc>

・添付表のひな形

<http://www.j-aba.jp/journal/attach.doc>

・投稿前のチェックリスト

<http://www.j-aba.jp/journal/checklist.doc>

・佐藤方哉先生の主要業績一覧

<http://www.workitout.jp/simamune/contents/MasayaSato20101029.pdf>

編集後記

秋号（11 月 25 日発行）のニューズレターを年の瀬にお送りすることになってしまい、申し訳ございません。

今号は、ご逝去されました佐藤方哉先生の追悼文を理事長の藤健一先生をはじめとして、山口薫先生、望月要先生、遠藤清香先生にお願いをさせていただきました。急なお願いにも関わらず、お引き受けいただきありがとうございます。

また第 28 回大会（神戸親和女子大学）について、事務局長の権藤先生、学会賞を受賞された

藤坂先生に加えて、新しい試みとして大会体験記を、若い大学院生の方をお願いをしました。

海外に関連する情報は、黒田先生にお願いをした連載の「海外で学ぶ学生、海外で働く専門職」に加えて、山本先生の「Local Beer SIG」のお話、さらに慶應義塾大学でのシュライブマン先生のご講義の報告など、内容の充実したものにになりました。

次号（冬号）は青山先生のご担当です。それでは皆さん、良いお年をお迎えください。（野呂）

J-ABA ニュース編集部よりお願い

- ニュースレターに掲載する様々な記事を、会員の皆様から募集しています。書評、研究室紹介、施設・組織紹介、用語についての意見、求人情報、イベントや企画の案内などです。原稿はテキストファイル形式で電子メールの添付ファイルにて、下記のニューズレター編集部宛にお送りください。掲載の可否については、編集部において決定します。

- ニュースレターに掲載された記事の著

作権は、日本行動分析学会に帰属し、日本行動分析学会ウェブサイトで公開します。

- 記事を投稿される場合は、公開を前提に、個人情報等の取扱に、十分ご注意ください。

〒305-8577 茨城県つくば市天王台 1-1-1

筑波大学障害科学系園山研究室気付

日本行動分析学会ニューズレター編集部

園山 繁樹

E-mail: sonoyama@human.tsukuba.ac.jp